

読みの感性を育む学習法の工夫

福島 靖之

1 自ら学ぶ力を育てる

教育が学校教育に限らず、生涯教育という広い概念でとらえられるようになってから久しい。求めて自ら学ぶ能力や態度を育てることが、就学年齢を過ぎた後も学び続け自己を高めて、充実した人生を送るとともに、高度情報化・国際化していく社会に対応できる人間を育成することにつながるのである。知識偏重型のつまこみ式教育は、社会的には次第に否定されながらも根強く残り、というよりもますます繁栄し、受験のための場あたりの教育を支えている。単なる文化の伝承の教育だけでは、ますます変化が激しくなるこれからの社会を支えることはできず、積極的によりよい社会を創造していくことはできなくなるだろう。

自ら学ぶ力＝自己教育力を育てるために、学校では、具体的にどのような力を育てていけばよいのであろうか。次の6つの要素はその解答としてよく整理されている。（＊1）

- ① 基礎学力
国語科で育てるべき言語の力「基礎」と全教科共通の学習法「基本」
- ② 学習意欲
内発的に学習に向かおうとする積極性
- ③ 問題発見力
教師に与えられるのではなく、学習者自らが発見しようとする能動的力
- ④ 学習構想力
学習者自身が学習の仕方を考えていく力
- ⑤ 情報操作力
映像や言語を媒介とした情報の収集・選択・活用の力
- ⑥ 自己評価力
自らの学習全体を振り返り、新しい問題を発見する力

以上の分類に従って考えれば、本編で述べる問題作りの学習は、(2)の問題発見力の育成に関わる実践であると考えることができる。

2 問題作りの学習

学習に主体的にかかわるとき、そこには自分なりのめあてが存在する。つまりなんらかの問題意識を持ち、それを追求していこうとする姿勢が主体的な学習者の姿となって表れるのである。

問題作りの学習は、そのような意識を自然に持たせる上で、また本文をじっくりと読ませるために有効であると考えられる。子どもが作ったものであるから、クイズ形式になりがちで、学習課題というには浅い内容のものも多いが、子どもが主体的に楽しみながら進めていくことのできる学習であるという点で、その意義は大きい。さらにこれを学習のパターンとして定着させていくことで、子どもだけの力で進めていける学習とすることも可能である。主体的な学習活動を成立せしめる鍵は次の二つであると考えられている。（＊2）

- (1) 学習問題への関心を高めること
- (2) 児童・生徒の興味をひく活動を設定すること

この二つの鍵に照らし合わせたとき、子ども自らの発想による問題作りであることや子ども相

互の関わりによる学習であるという点で、主体的な学習活動を期待できる。また、「読みは、情報読書も文学読書も何かを知ろうとする行為である。—中略—すなわち、読みは、それらの題材を興味・関心の対象とし、それらを追求する行為として成立する。しかし、読みの学習において児童・生徒の意識は、未知のもの・ことを知ろうとするにとどまるものではない。彼らの意識は文章あるいは表現そのものにも向けられるし、またそれをどう読むのかの方法にも向けられる。」(*2)

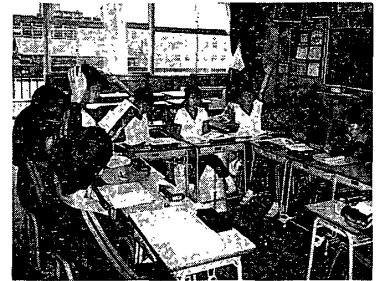
—確かに子どもが作る問題には、未知のものを知ろうとするものだけではなく、解釈のしかたを問うものや、想像したことを問うものもある。その意味で問題作りは、読みを深めていくために有効であると考えられる。

5年生の教材「大造じいさんとガン」は、老狩人とガンの群れの頭領とのかけひきや心の交流が豊かな情景描写とともに描かれた作品である。その情景描写から大造じいさんの心の動きを読み取らせたい。

集団としての学習に先立って、個別の読みを行わせるために、問題作りの学習に取り組ませた。少なくとも5問は問題を作り、それに自ら答えるものとし、時間を見計らって発表させた。本学級の児童は、本来この問題作りを好み、自ら進んで学習することができる。一人が10問前後の問題を作り、その中でそれぞれが問題の質を工夫していた。1問1答式になりがちな問題の質を向上させるため、いろいろな答えが出るような問題を作るよう意識させて臨ませた。子どもたちが作った問題には次のようなものがあった。

(1) 決まった答えが出るタイプ

- ①大造じいさんはどこに住んでいて、何才でしょう。
- ②ガンの群れを率いるのはだれでしょう。
- ③どうして「残雪」という名前がつけられたのでしょうか。
- ④いつごろからこの沼地に残雪がくるようになったのでしょうか。
- ⑤大造じいさんはなぜ「はてな。」と言ったのでしょうか。
- ⑥特別な方法とはどんな方法でしょう。
- ⑦ガンをつかまえたとき、辺り一面に羽が飛び散っていたのはなぜですか。
- ⑧ガンは鳥類の中で利口な方ですか。利口ではない方ですか。



(2) 複数の答えが出るタイプ

- ①なぜ大造じいさんは四、五日もえさをばらまいておいたのですか。
- ②一晩たてばまたわすれてやってくるにちがいないと思い、たくさんつりばりをばらまいていたのに、一羽もかかっていなかったのはどうしてでしょう。
- ③うなぎつりばりをしかけた時、大造じいさんはなぜなんだかうまくいきそうな気がしたのですか。
- ④なぜじいさんは夢中でかけつけたのでしょうか。
- ⑤なぜじいさんは、むねをわくわくさせたのですか。
- ⑥残雪たちが昨日のわなにかからなかったのはなぜですか。
- ⑦なぜ次の日、うなぎつりばりに一羽もガンがかかっていなかったのでしょうか。
- ⑧なぜうなぎつりばりの糸がみなびいんとひきのばされていたのですか。
- ⑨残雪が頭領らしい所を1段落の中からぬきだしましょう。
- ⑩大造じいさんは特別な方法を失敗して、どのようなことを感じていますか。
- ⑪ガンの群れは、なぜえさ場を変えたのでしょうか。
- ⑫なぜ残雪は沼地のうちでも見通しのよい所をえさ場を選んだのですか。



⑬残雪が仲間に指導したことはどんなことですか。

⑭なぜじいさんは感たんの声をもらったのですか。

(3) はっきりと答えが出ないタイプ

① どうして大造じいさんはガンがりに夢中なのですか。

② ガンたちは、仲間がつかまえられたときどう思いましたか。

③ 大造じいさんがガンをつかまえるのに失敗したときの気持ちは？

④ あまりりこうなほうではないといわれているガンがなぜあの小さい頭にたいしたちえをもっているのでしょうか。

(1)のような一問一答式の問題は学習を重ねる度に減っていく傾向にあり、子どもたちに意識させることによって、問題の質を向上させることはできるようだ。

これらの問題に対し、子どもたちは自問自答の形で解答をノートに書き込んだ。自分の問題を発表し、友だちに解答を言ってもらうことで自分の解答と照らし合わせ、その適否を自己評価できるようにもなる。ノートには次のような解答が書かれていた。

(1) ③左右のつばさに一ヶ所ずつ、真っ白な交じり毛をもっていたから。

⑤ガンの群れがいつせいに飛び立ったから。

(2) ②・今までやったことのないとおきの方法だったから。・特別な方法に自信があったから。・ガンは鳥類の中であまりりこうなほうではなかったから。

⑨・あのちいさい頭の中にたいしたちえを持っているものだな。・くやしい。残雪のためにしてやられた。

(3) ②・かわいそうだな。・あいつはどうなってしまうのだろう。・無事でいてほしいな。・ぼくたちはもう行かなければならない。さようなら。

③・残雪が頭領として、仲間を指導してひっぱっていくから。・これまでにいろいろな経験を積んでいるから。

(2)や(3)の問題については、一人が何通りかの解答を想定しながら作っているもの見られ、一通りの考え方にとらわれず、いろいろな角度から考えながら、解答を導き出そうとしたものと思われる。「これでよいだろうか。」「もっとほかの考え方はないだろうか。」と自分自信に問いかけてみる。いわば、自己内対話をしながら学習を進めようとしたものであろう。この学習姿勢が主体的な学習者を育てる上で大切であろうと考える。

子どもたちがこの問題作りの学習を好むのは、まず自分が主体的に学習を進められること。次に友だちの気づかないことを発見できたのではないかと期待感を抱けること。そして、自分の問題に答えてもらうことによって友だちと考えを共有できること。というような理由からではないかと思われる。

問題作り

Q 1 残雪とは何のことですか？
A ガンにつけられた名前

Q 2 特別な方法とはどんな方法でしょうか？
A イッコカンのおえをあさる辺り一面に、くいを打ちこんで、タニシを付けたウナギフリばりを、たたみ糸で結びつけておくこと

Q 3 なぜじいさんは、むねをめぐりくさせられたのですか？
A なんだかうまくいさそうな気がしたから

Q 4 大造じいさんは特別な方法をし、ばいしとのうなこを感していますか？

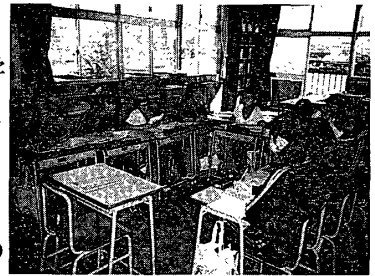
Q 5 残雪がやっていた方法は、何ですか？
A 今更には、この方法は、残雪が、大造じいさんに、教わった方法だ。

Q 6 なぜ、今更には、この方法を、残雪が、大造じいさんに、教わった方法だ、と、思っているのですか？
A 今更には、この方法を、残雪が、大造じいさんに、教わった方法だ、と、思っているのは、大造じいさんが、この方法を、残雪に、教わった方法だから、です。

Q 7 大造じいさんは、なぜ、夢中で、かけつけたのですか？
A 仲間が、つかまわられた、ところから、仲間を、助けたい、から、です。

3 書き込みの学習

書き込みは、自己内対話をしながら本文を読み進めていく個別学習の形態の一つだが、この方法が問題作りの学習と関連があり、これを生かせるものと考え、取り入れることにした。



第3場面は、ハヤブサの登場によって、残雪がとった行動をきっかけとして、大造じいさんの気持ちが変わっていくという、本編の山場となる場面である。大造じいさんの視点から動的な記述を追いながら彼の心情を書き込ませた。子どもは、空を見上げる自分を想像し、はらはらしながら残雪の行動を見つめていることが分かる。

<p>大造じいさんは、ぐつとじゅつをかたに当てる。残雪をほらいました。が、なんと思ったか、再びじゅつを下ろしてしまいました。</p> <p>残雪の目には、人間もハヤブサもあんなにやさしい人はいない。ただ、救われたい。仲間が助けてくれた。敵に近づかなくていい。その、あの大きな羽で、不意を打たれて、さすのハヤブサも、空でふらふらとよるめさす。ハヤブサも、残雪のまな元で飛ぶ。残雪は、</p>	<p>大造じいさんと残雪との心の交流を読み取ろう。 第三場面 「今年、はひとつ、これを使ってみるかな。」 方法 二年前につかまえた、ガンをあとりに使って残雪の仲間をとらえる。最初に飛び立ったものの後について飛ぶ。残雪がとった行動とそれを見ていた大造じいさんの気持ちを考えよう。視写</p> <p>もう一けり、ハヤブサがこううけさの空を横切りました。大きなかけが空を横切りました。残雪です。</p>
<p>残雪は仲間を助ける。仲間のために、戦っているのだ。殺すわけじゃない。残雪は仲間を助ける。仲間のために、戦っているのだ。殺すわけじゃない。残雪は仲間を助ける。仲間のために、戦っているのだ。殺すわけじゃない。</p> <p>残雪は仲間を助ける。仲間のために、戦っているのだ。殺すわけじゃない。残雪は仲間を助ける。仲間のために、戦っているのだ。殺すわけじゃない。</p>	<p>あ、あぶない。もったいなくない。</p> <p>気持ち</p>

ポイント

この書き込みから、大造じいさんの心情にふれ、人柄にも考えを及ぼせることができるのではないかと思ひ。大造じいさんの人柄について考えさせた。

- ・私は大造じいさんはとっても心のやさしい人だと思います。鳥の気持ちが分かってひきょうなやり方を使わない、他のりょうじとはちがう人だなど思いました。今まではわなとかいろいろしかけを作って、それだけにしか心がない人だと思っていたけれど、とってもやさしい心の人だなど思いました。
- ・強く心をうつものがあれば、敵であろうが好意を持つことができるやさしい人。
- ・初めはりょうじゅうで動物をうつざんこくな人だなあと思ったけど、本当はガンを思いやるやさしいいい人だなど思いました。
- ・人（鳥）がいっしょうけんめいしているときにはじゃまをしない。人（鳥）の気持ちをよく考えている。

記述から、大造じいさんを「やさしい」と感じた子どもが多いことが分かるが、彼が残雪を見逃したことを命を救ったと考えたのであろう。決してそうではないことは、次の場面での彼の発言から分かるのだが、この場面の終末では残雪との戦いをあきらめたともとれる書きぶりになっているので、そう感じるのも無理はない。学習のふりかえりにも、やさしさということに決着させようとする記述が見られた。

- ・今日は大造じいさんとガンの心と心の通じ合いを勉強しました。大造じいさんは今までひきょう人と思っていたけれど、この場面を読んで、やさしい心の持ち主ということが分かりました。残雪も仲間思いのやさしいガンなんだなと思いました。
- ・大造じいさんはとってもいい人なんだなということが分かりました。残雪もりっぱだなと思いました。
- ・今日は残雪に対する大造じいさんの心のうつりかわりを中心にやったと思います。前まではひきょうなやり方でふつうのりょうしと同じだと思っていたけど、この戦いを見て、大造じいさんに好意が生まれたというMさんの考えがすごかったです。

4 キーワードから読み取る学習

第4場面は、一冬を共に過ごした大造じいさんと残雪がついに心を通わせ、友情ともとれる信頼で結ばれるまでが描かれている。時間的な経過が早いので冬の間両者にどのようなやりとりがあったのかは定かではないが、第3場面での残雪の行動や態度に感銘を受けた大造じいさんの様子から想像することはできる。飛び立つ残雪を見送りながら大造じいさんが言ったことのなかに「ガンの英雄よ」という言葉がある。これに着目させ、冒頭の「いまいましく思っていました」から変わっていることに気づかせて、大造じいさんの心情の変容を考えさせた。

子どもたちはどのように読んでいるのかノートから探してみると、次のような記述が見られた。

- ・ハヤブサがおそってきたけど残雪が（おとりのガン）助けたので信用するようになった。
- ・最初はにくたらしかったけど、だんだん残雪と戦ってきたり助け合ったりガンに好意を感じてきた。残雪のすばらしさが分かってきた。
- ・ハヤブサとの戦いなどを見ていると、大造じいさんの心がうごいて、あんな人間のような知恵や気持ちを持っている残雪をそうかんたんにつかまえたくなかった。
- ・残雪の頭領としての姿がすばらしく、おどろいた。残雪が仲間のために頭領としてがんばっているのに、ひきょうなやり方でやっつけたくない。

「英雄」という言葉に大きなインパクトを受け、大造じいさんの心情の変容に気付いていることがよく分かる。大造じいさんは、残雪をやっつけることをあきらめたのではなく、あらたに戦いたかったのだということがこの場面で明らかになる。残雪を介抱したのは、いわばその仕切り直しのチャンスを作るためであると考えることができる。しかし、巧妙なわなを仕掛けて仕留めようとしたこれまでの戦い方とは、これからの戦い方は異なるであろうことは「正々堂々と」という彼の言葉から容易に想像できる。

学習のふりかえりから、大造じいさんの心情の変化や残雪との心の交流に視点を置いた学習ができていたことがうかがえる。

- ・今日私は、大造じいさんの残雪への思いが変わっていくことを考えていって、大造じいさんは本当はすごくやさしくって、強い人だということが分かりました。今年の冬も堂々と戦ってほしいと思いました。
- ・大造じいさんの残雪への心の移り変わりが分かったのでよかったです。
- ・大造じいさんとガンの気持ちが一つになったからびっくりしました。初めはにげたりつかまえてようとしていたりしていたけど、最後は仲直りしたからすごかったです。

本文の中から作品の本質に関わるキーワードを見つけることができる能力は、読みの感性の一つである。教師側からこのキーワードを提供していくうちに、次第に子ども自らキーワードを発見できるようになるものと考えられる。キーワードを起点として考えをふくらませたり、キーワードを根拠として疑問を解決していくことができる能力は、低学年のときから積み上げてきた言葉へのこだわりが基盤となっているのは言うまでもない。

5 課題学習への発展について

問題作りの学習は、クイズ感覚で短時間の内にできるため、子どもたちも、抵抗なく取り組むことができる。主体的に学習を進めることができるということの中には、こういう要素があるのかもしれない。これを単元全体を見通した課題として計画的に取り組んでいこうとした場合、子どもが作った問題をそのまま取り入れることは難しい。作品の主題に迫りうるかどうかという質的な検討が必要に



なるからである。課題学習を進める上で、大きな問題点が三つあるといわれている。「一つは、すぐれた課題は、文章がよく読めた上でないと作れないにもかかわらず、一読後課題を作らなくてはならないという矛盾。いま一つは、課題作りにおいて、一人ひとりの疑問を取り上げていくと、整理したり解決したり過程で時間がかかりすぎるといことである。三つめは、教師の指導性と学習者の主体性をどのように調和させていくかという問題がある。」(*3)

—実際に授業をしていると、確かにこの3つの問題点は避けて通れない問題としてのしかかってくる。ただ子どもを主体的な学習者として育てる上で、課題学習は次のような点で可能性をはらんでいると考えられる。(*3)



(1) 自分たちが作った課題なので、学習に積極的に参加でき、子どもが学習の主体になれる。

(2) 学習者一人ひとりが課題に取り組むので個別学習の場と時間が保障される。

(3) 課題をめぐって少人数で話し合う場と、クラス全体で話し合ったり報告し合ったりするので、読みが深まる。同時に話し聞く力がつく。



(4) 課題をめぐって一人で読みこんでいく時、学習者は主体的な読み手となる。

(5) 課題作りとその解決のプロセスは、小さな単元学習である。読み・聞き・書く・話すを融合した総合単元学習への出発点とすることができる。

—個別の学習では高まりにくいことを補うために、集団での学習は必要である。問題作りが課題解決学習へと発展していくには、特に(3)の問題点が大きく関わってくるようである。

書き込みの学習やキーワードを起点とした学習も、視点を決め、自分で学習を進めていけるという点では、課題学習につながっていく学習法であると考えられる。この学習の視点が、読みの感性の一つになることは確かである。具体的な視点を持って読んでいくうちに共感的な読みも批判的な読みもできるようになって自ら読みの立場を決定できるようになるのだと考える。今後も読みの視点を明らかにすることによって感性を育むことができる学習法について実践を重ねていきたい。

《引用文献》

- * 1 浜本純逸「自己学習力を育てる総合単元学習」・・・田近洵一編『ことばの学び手を育てる国語科の授業』(ぎょうせい1990)からの引用文(明治図書『国語教育』'94. 8)
- * 2 田近洵一「自ら学ぶ子が育つ授業」(明治図書『国語教育』'93. 4)
- * 3 浜本純逸「課題学習の可能性」(明治図書『国語教育』'91. 7)